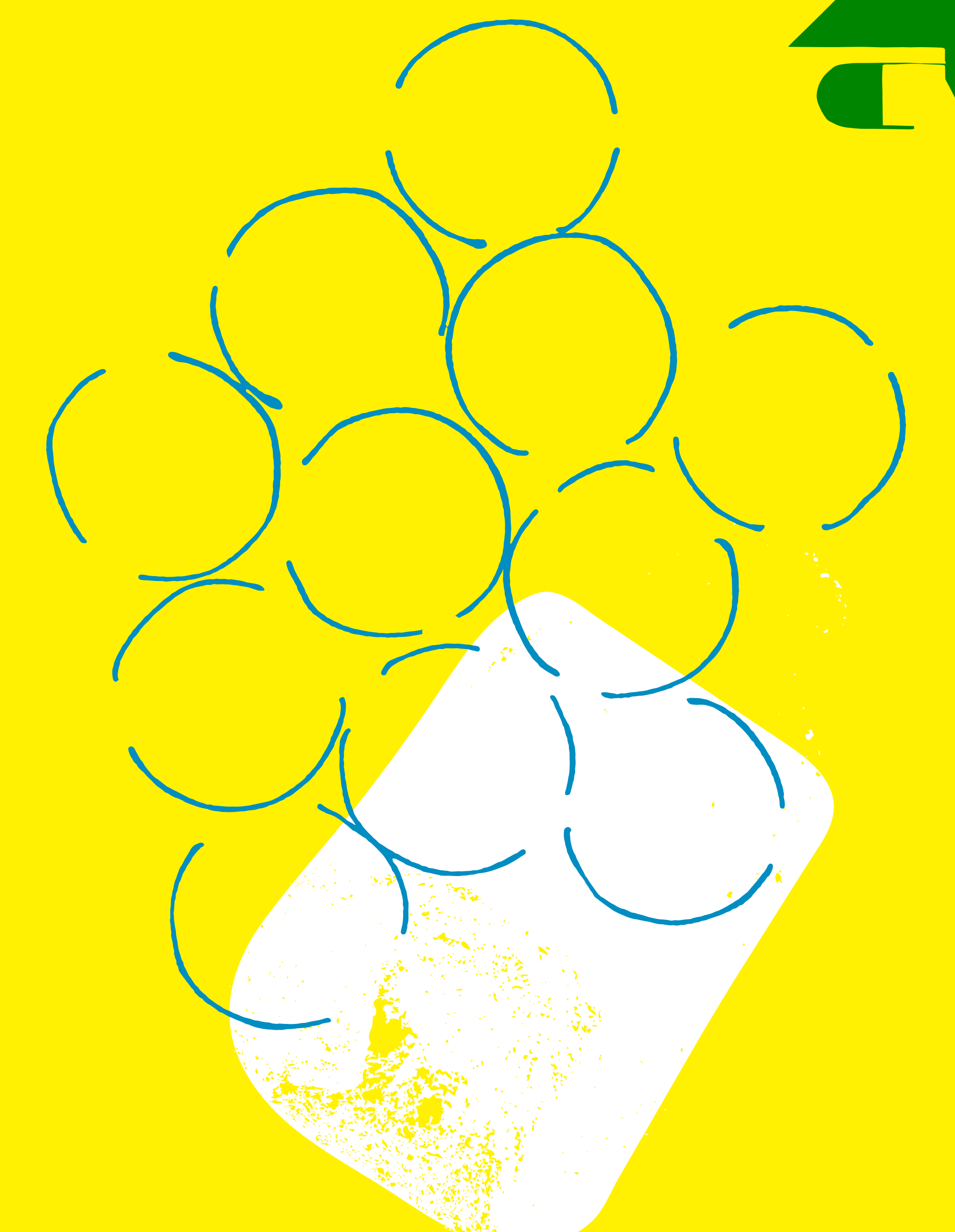
御坊市
gobouichi

お寺が開く
お寺で開く、
出張店市



2026. 6. 20 SAT. 21 SUN. 10:00-16:00
真宗大谷派 三条別院

御坊市 gobouichi

お寺が開く、お寺で開く、出張店市

会期：2026年 6月20日（土）・21日（日）
時間：10時〜16時（両日とも）
会場：真宗大谷派 三条別院
（新潟県三条市本町2-1-57）

※マイバッグをご持参ください。
※ペットの入場はご遠慮ください。
※履き物は備え付けの袋に入れてください。

P 駐車場について

御坊市では、境内地に来場者様の専用駐車場を設けておりません。各種交通機関や近隣有料パーキング等をご利用ください。

「居場所」という言葉を聞いて、皆さんは何を考えますか？仏教では、人はひとりではない、と教えられています。しかし現代の私たちはどうでしょうか？この競争社会で負けられないし、人に弱味を見せる事が悪いものだと思われています。助けてほしいに助けての声も出せない、そんな社会なのではないでしょうか。私たちは頑張り屋です。自分だけを頼りにして日々の生活を営んでいます。ですから、本当の自分の「居場所」が分からなくなっているのではないでしょうか。

私たちは生きていくうえで、どんなに孤独を感じて打ちひしがれる事があったとしても、決してひとりでは無いと思います。みんなそれぞれが悩み苦しみ、自分の「居場所」を求めている。

私は自分の「居場所」というものは、自分が自分らしく居て良い場所こそが、本当の自分の「居場所」なのだと考えています。

どうかこの御坊市という場に、肩の力を抜いていらしてください。ただそのままのあなたで、このひとときを過ごしていただけたら嬉しく思います。ここが、あなたにとっての一つの「居場所」となりますように。

2026年御坊市実行委員会　委員長　村山尚秀

ぜひ本尊へ手を合わせてから
お買い物をお楽しみください。

僧侶による読経
○時間（両日とも）▽14時
本堂内にて、多数の僧侶によるお経が上がります。ぜひ合掌ののち、心静かにご拝聴ください。

出店

物品販売

gypso ／ 青花雑貨店 ／ サボちゃん ／ aoiro ／ cantabile ／ 川名 萌子 ／ FURICO ／ koko.switch ／ atelier hemslojd ／ 子供服ピクニックボックス ／ tent zakka&kids ／ bubokku ／ うさぎや+ ／ STRANGER ISLAND ／ Rerun フェアトレード ／ Yuan ／ poco a poco ／ 亮布研究所 ／ harukaakahane ／ 衣屋 ／ Rocca ～六花～ ／ むらたくつや ／ 組子屋 継 ／ mikako kondo ／ lino ohana ／ 塚田 晶子 ／ シロツメ舎 ／ hobbit ／ hitsujigoro -kaori takahashi- ／ ギンゲツ陶芸 ／ 趣味のひととき ／ ひもすがら文庫 ／ sen ／ 木こり家 ／ 澤田 勇一朗 ／ みかんオレンジ ／ splendide. ／ Chiroru ／ Lilium ／ SANJO PUBLISHING ／ mameritsuko ／ ニイガタお寺メイキング ／ KUJIRA Flower ／ 絵本の店 omamori ／ niniko glass ／ koti kukka

飲食販売

OldtownDessertCompany ／ マフィンベル ／ CRONY STAND ／ [et] ／ THERE IS NOEND ／ WILLOW HOUSE ／ pentoito －ペントイトー ／ いも奉行ごせん ／ Bar Book Box ／ spice up spot ／ 本間屋 ／ 糀屋 団四郎 ／ パンとお菓子のお店 Luana ／ 珈琲とおみやげの店 アルペジオ ／ YOIYOI ／ ARTISANS

キッチンカー・テント

SOYLcafe ／ Kitchencar OmaOma ／ 旅茶屋 ／ アソンブロッソ!新潟1st ／ armonia ／ あかしま ／ うおぬま縁むすび ／ BABY Relucks ／ わたご飯店 ／ コネルキッチン ／ タコスの森 ／ 日本茶専門店うずまき屋キッチンカー ／ U.N.B.Y ／ なみ福茶屋 ／ TREE ／ バニングキッチン

三条別院イベント

御本市

お坊さん達が普段読んでいる本をジャンルを問わず集め、販売する古本市。仏教書以外にどんな本を読んでいるんだろう、、お坊さんの本棚をのぞいてみませんか？（売上は御坊市の運営費に充てさせていただきます）

○会場▷書院

お坊さんと香袋づくり

ハーブインストラクター杉原ヒロミ氏（にこ&ハーブ♪）監修のもと、お坊さんと一緒に香袋作り体験。自由に香料をブレンドして、自分だけの香袋を作れるワークショップです。　※材料が無くなり次第終了

○会場▷本堂裏手後堂の香部屋
○参加費▷800円
○時間（両日とも）▷随時
○所要時間▷20分位

御坊市こども探検隊

三条別院を探検しよう！スタンプを集めたり、クイズに答えたり、ミッションを達成して、景品をゲットしよう！

○受付場所▷本堂裏手後堂の奥
○参加費▷無料

授乳室兼オムツ替え部屋

授乳室・オムツ替え部屋をご用意しました。お気軽にご利用ください。

○場所▷旧御堂付近センター室

僧侶のお話

お坊さんのお話を聞くことのできるコーナーです。身近な事柄をテーマに、個性豊かなお坊さんがお話しします。どなたでもお気軽にお越しください。

○会場▷奥書院　○テーマ▷「居場所」
○参加費▷無料　○所要時間▷20分位
○定員▷各回30名程度

20日 ①11:00〜 鈴木 唯我／②13:00〜 藤原 顕信
21日 ①11:00〜 新田 顕光／②13:00〜 朝倉 奏

三条別院七不思議ツアー

三条別院職員によるガイド付きツアーです。三条別院に初めて訪れた人・深く知りたい人、どなたでもご参加いただけます。

○受付場所▷本堂入って正面右側
○参加費▷無料

両日とも ①10:20〜／②12:20〜

あそべる！ 子ども用品チャリティ販売会 by若坊守会

ご寄付いただいた絵本や子ども用のおもちゃで自由に遊べるブースです。また気に入った物品は購入可能です。売上金は、新潟県フードバンク連絡協議会へ寄付いたします。

○会場▷本堂裏手後堂の香部屋

お楽しみ出店 by高田仏青

お楽しみ射的と手作りピンボールと物品販売

○会場▷本堂裏手後堂の香部屋

https://gobouichi.com/
instagram.com/gobouichi
facebook.com/gobouichi

協賛／株式会社吉運堂　備品協力／三条マルシェ
主催／新潟教区若者仏教会　mail：gobouichi@gmail.com
電話：090-4709-5401（手島）、080-5041-8678（村山）

特別座談会

ひらくお寺 そして居場所

お寺でひらかれるマーケットイベント「御坊市」。モノをきっかけに人が出会い、ゆるやかにほどけていく時間が流れています。

『ここにいていいと思える場所』。そう思える場所を見つけていくための、小さなきっかけ。なぜお寺という場でそれが生まれるのか、そして「居場所」というテーマをめぐって――

関川一郎（FURICO/ケイ・アート）
燕三条を拠点にデザイン・印刷等を手掛ける会社「K・ART」代表。自社ブランド「FURICO」にて、地域の職人の手仕事によるバッグ等の企画・デザイン・販売を行っている。

佐藤悠人（衣屋/UTOPIA）
地場産素材を中心に、「旅する衣」の物語をこめた衣服や小物を制作するブランド「UTOPIA」を展開。新潟市学校町通にアトリエ兼店舗の「衣屋」を構える。

本間正紹
新潟教区若者仏教会会長、御坊市実行委員

手島創
御坊市実行委員、主に出店者担当

御坊市という場・お寺という場

本間：お二人とも御坊市に何度かご出店いただいていますが、御坊市にはどんな印象がありますか？

佐藤：お寺の中で開催するイベントっていう表層的なイメージだったのが、実際出てみると、最初にみんなで朝礼があったりとか、「仏教とは何ですか」っていうことも教えていただいたりとか、来場者さんたちも、モノ作りを見るだけではなくて、実際にお寺の中を感じるみたいな。トータル的にすごく良いイベントだなって最初に感じました。あと、煌びやかなお堂や、実際にお経を読まれるところに対峙して、これを通じて自分はどう成長できるんだろうっていう、きっかけになるような感覚があって。毎回すごくいい経験をしているという感じがします。

関川：私はそんなに多くのイベントには出てないんですけど、出ている中では出店者さんたちの雰囲気がやっぱりいいので、毎年出させていただきたいなと思っているのと、単純に私、地元で車で10分くらいなので。こういう好きなイベントが地元にあって、クオリティが上がっていくのがやっぱり嬉しいので、参加してお手伝いさせてもらえるのは嬉しいです。最近だと遠方から来られた出店者さんとも仲良くなって。「1日目うちに泊まってもらって2日目一緒に行こうよ」という交流もあって。

本間：関川さんは地元ということですが、御坊市に関わる前から「三条別院」はご存知でしたか？

関川：（三条別院は）ぼんやりとあるな、くらいでした。隣に保育園もあるし、知っていたんですけど、どういう存在かはよく分からずに。大人になってから改めて「あ、すごいものがここにあるんだ」っていう。

佐藤：僕は全然知らなかったです（笑）。生まれが秋田で「新潟、お寺とか　神社が多い」みたいなのは、聞いてはいたんですけど。めちゃびっくりして入って「あ、こういう感じなんですね、お邪魔します…」みたいな感じで。

本間：ここは、ある意味拠点なので、バカでかすぎ……だいぶでかいですよね（笑）。

手島：宗教施設での出店って他にありますか？あまりないのかな。

佐藤：お寺はあまりないですね。神社でのイベント開催はよく見ますけど。

本間：神社って、日本人にとって全体に開いているものというイメージがあるのに対して、お寺って「一つの宗教・宗派に所属する人たちのもの」みたいなイメージがあると思うので、「お寺でイベントやりますよ」って言われると、ちょっと身構える人もいるのかもしれませんね。

佐藤：お寺って、勝手なイメージでその土地の寄り合い所というか、困ったら行くところだったと思うんですけど。現代だとお墓参りのときくらいしか行く機会がなくて。解放しているものなんですか？「いつでも来てください」みたいな。

手島：そこのお寺の住職にもよりますね……。ただお寺って僕らの考えでは、住職のものじゃなくて、その地域のご門徒、檀家さんのものだから、住職はただ住まわせてもらって管理するという役を担っているんです。だから、お寺に「行く」っていう言い方よりも、お寺に「帰る」っていう言い方のほうが近いのかなって勝手に思っていて。

佐藤：帰る。へぇー。

手島：だから「お寺を開く」っていうのは、来てくれる方に、「お寺ってそういうものなんだよ」って伝えるという意味でもあるし。あと、やっぱり住職はお寺を運営していかなきゃいけない面があって。やっぱり人に来てもらわなきゃいけない。そのために色んな催し物をする。でも、お坊さんはノウハウがないから。「じゃあここで御坊市をやって、このノウハウを自分のお寺に持って帰ってやろう」っていうのも御坊市の目的のひとつなんですよね。

本間：実際にここに関わったお坊さんで「じゃあ自分のお寺でもマルシェやってみよう」という人たちも何人かいたりしますね。

モノ作りの中にある「対話」

手島：お寺の話が続いているけど、例えば僕ら僧侶って、昔からずっと繋いでもらってきたお経を読む、ということをしてお布施をいただいていて、ゼロベースでやっているわけじゃないんですよね。でもお二方のような出店者の方って、ゼロベースからモノを作るじゃないですか。どういうことを考えてモノを作っているんですか？

関川：クリエイターとかデザイナーって、あまりお金のことは考えず、自分の表現をするんだ、みたいに思われているような気がしますけど、私はやっぱり商業デザイナーなので、当たり前ですけどクライアントさんから依頼されてそれに合った物を作る。その仕事をより一般の人に知ってもらいたい、B to BじゃなくてB to Cに興味を持ってもらえる何かを作らなきゃいけないなと思って、「FURICO」というブランドでモノを作り始めました。デザイン・印刷の仕事で扱っている素材を基に、自分のデザイン的な視点で「何かできないかな」というところから探っていって、徐々に、工業用のテント生地のバッグみたいなものができていきました。

本間：初めからバッグを作ろうと思っていたんですか？　それとも、いろいろ試行錯誤する中で、そういう方向にたどり着いた？

関川：割と最初の方から「バッグできそうだな」というのはありました。毎年少しずつ変えていく中で、今の形になるには、何年かかかったんですけど。「自分が作りたいもの」とか「表現したい」みたいな気持ちがあったわけじゃなくて。「できること」と「自分の仕事を広げていくためにやるべきこと」の掛け合わせというか。あと、ちょうどそれを作ってもらえる人がいたので、それで徐々に固まっていったっていう感じです。

佐藤：関川さんのお話を聞いて、僕は真逆のところからモノ作りを始めたなと。専門学校を卒業後にすぐ自分のブランドを始めて、そのまま突き進んじゃったみたいなタイプで。表現が先にきていて。洋服って人の彩りや装いを作るものなので、言い方が悪いけど当時は、支配する感覚があったんです。「自分のデザインした洋服は自分のこと好きだろ」みたいな（笑）。承認欲求があったんだと思うんですけど。それでも表現できれば面白そうっていうのが始まりで。だけどそれで生きていこうとしたときは、大変でした。表現がそのまま表れる、すごく奇抜な洋服ばかりで、しかも一点物で。価格のつけ方も分からなくて、好きな人は買ってくれるけど、長続きしていかないといらなくて。そうやって作っていくうちに、今の時代はセレクトが大事だなと思ったんですよね。誰もが見たことない物を創出しようっていうのは限界があるし、発信する人も増えて飽和したんだと思うんですよ。洋服は消費物になってしまったという現状があって、「ゴミになる服を作ってどうなるんだろう」っていう悩みがあったんですね。そんな中で、「消費物」という捉え方から「宝物」に意識変容をして。「宝物を纏う」みたいな思いになってもらえるモノを作りたいっていう風に切り替えました。新潟や日本の素材にこだわってモノ作りをすることで、生地から愛着が湧いていれば、素直にお客さんに伝えられるというか。シャツや靴下なんかも、決まった形の物ではあるけど、「表現したい」という自分のフィルターがあるから、その自分の空気感やコンセプトを発信して、お客さんとの対話の中でアップデートしていくみたいな。なので、関川さんの「FURICO」のバッグ自体がどんどんアップデートされて今に至るっていうのと近くて。やっぱり出して反応を見ての繰り返しで、ある種、モノで対話をして、今の場所にいるっていう感じで。

手島：表現ってそういうことですよね。出してみて跳ね返りを見て、アプローチを変えてみようっていうやり方で、それこそバッグがアップデートされていくような感覚になっていくっていう。

本間：クラフトにこだわるっていうコンセプトを、御坊市がブレずに今まで来ているのは、おっしゃる言葉を借りれば、モノを通じて「対話」をして繋がっていくということをやっぱり大事にしているというか。イベントの規模を広げて、モノ作りだけじゃないワークショップが入っても、何か事象・物事・物品、そういうものを通じて人と人が関わっていく、繋がっていくっていう、多分そこが芯として大事なんだろうなと。例えばお寺でお坊さんが法話するときって一方通行になりがちで。本当はお話に対してリアクションをもらって、お坊さんもそれを受け取ってさらに考えていきたいということがあるんです。だから御坊市では、場所を提供して「ここでマルシェをやってください」だけじゃなくて、「お寺ってこういう場所なんだな」とか「そういう場所で人と人が繋がっているんだな」とか「そこにお坊さんっていう人がいて、同じように関わっているんだな」というところに繋がるといいなというのが、僕は結構思ってやっていますね。

手島：結局その、さっきお二方がおっしゃった「表現をして相手とのコミュニケーションを図る」ということですが、御坊市でまさにお坊さんは、言葉は悪いけど「出店者さんをツールとしてコミュニケーションを図ろう」としているんです。「来てください、来て何するんですか、良い出店者さんがいますよ」という。

お寺でイベントをやるということ

佐藤：出店者さんたちと来るお客さんたちに対して、どこまでその思いが伝わってたら嬉しいですか？　マルシェがあるみたいな感覚で来られる方ももちろんいるだろうし、お寺に興味があって「中が見れる！」という感覚で来る人もいるし。もっと深く入っていくと、思いを理解していくというところまで行くと思うんですけど。出店者さんも、同じように「イベントだ」って思って応募される方も多いと思うんですよね。

本間：まさにおっしゃるようにグラデーションがあって。まずはイベントを普通に楽しみたいという人たちが来てくれて。次には、「お寺ってこういうことやるんだ」とか「関係ない人でも入っていいんだ」というところを知ってもらうということがあります。ここから先は、仏教に触れてもらって、「お寺に行ってこういう教えを聞いて、これがすごいためになった」とか「自分の考えてきたことと違う考え方があるってことが分かった」とか、そういう風に感じて帰ってもらうということが一つの段階にあります。もう一つ上に行くと……「うちの宗派に入ってもらえたらいいな」とか（笑）。ここで関わったお坊さんのお寺って良さそうだなと思って、縁を持っていただくとか、そういうところまで行くといいんですけど――でもやっぱりまずは、お寺は別に怖い場所じゃなくて、ただそこに座って数時間過ごして帰るだけでも「ここで休めてよかったな」とか、そういうことをしてもらえるだけでもいい場所だということを知ってもらう。その辺りがスタートかなと思います。出店者の方はそこまで気にされる方がどれぐらいいるのか分からないですけど、逆に「宗教の場所に出るの、ちょっと抵抗あるな」って思っている方もいるかもしれないですし。

佐藤：僕はとくに入信とかしてないから、割とそういう意味でのフリーランス感はあるんですけど。

手島：無宗教を「フリーランス」って言い方、かっこいいな（笑）。

佐藤：そこまでこだわりがないから、特に抵抗ないんですけど。別の宗教に入っているから居づらいという方もいるのかな。どうなんですかね。

手島：多分この「御坊市」というワンクッションを置いていることで、そこまでお寺ということに来場者はフォーカスしてないんじゃないのかな。たまたまお寺でやっているということで。今、本間くんが言ったように「将来的には、門徒さんを増やしたい」っていう思いもあるんだけれど、根底にあるのって、そんな「寺」とか考えないで来てみなさいよっていうラフさはありますよね。だから例えば、お寺の本堂で寝っ転がるってちょっと抵抗あったりするけど、畳だから赤ちゃんとか子供たち走らせてもいいし、ハイハイそのままさせてもいいしっていう。靴を脱ぐというイベントだから、気楽さが一段階上がる。そういう意味で「寺だから」というのを取ることがお寺を開く一つの物になるのかな、なんて僕は思ってますね。

「居場所」というテーマ

本間：今回の御坊市でやるお坊さんのお話のテーマが「居場所」なんです。お寺でマルシェを開くことで、一人でも多くに人に「自分がここにいていい」と感じていただきたい、というのがコンセプトとして今年考えているところで。皆さん、普段「居場所」について、それぞれどう感じていますか？

佐藤：居場所は1箇所だけじゃなくていい、って感じはあります。家族、仕事場、こういう出店での居場所があって。関わる人も形も変わるし、複数持っていないと心の安定に繋がらないかなって思いました。

関川：たしかに、ここが自分の居場所だと思えるところが1つあるのはありがたいけど、そこだけになっちゃうと、そこが危うくなった時にガタガタになっちゃうから、いくつかあってもいいかもしれませんね。

手島：家の中だとどこが居心地良いですか？

佐藤：家に帰ったらやっぱり、出来ていない部分があるから、取り戻さなきゃみたいな。子供が一人いるんですけど、朝苦手だから「よろしくお願いします」って言う代わりに、帰ってきたら掃除とかご飯作ったりとか。子どもと奥さんがいるこの環境をどう良くするかを考える場というか。自分の居場所っていう感覚は正直そんなに重きを置いてなく。家庭の場づくりを整えたいみたいな。ソファに座ってテレビ見る、ここが安らぎの場所だ、とはそんなにならないので（笑）。

関川：場所っていうより、何をしている時とか、人と一緒であれば関係性とかが重要なんですかね。僕は、お酒が飲めないので、お酒の席に居場所がないっていう感覚があります。

手島：お二人の話を聞くと、根っからの表現者だから、自分の居場所はその表現ができる場所なんですね。

本間：自分を出せる場所って感じなんですかね。

関川：出せるというか、（自分を）受け入れてもらっている感じの場所みたいな。

本間：ちなみに、お酒飲めないのにお酒の席にいる時って、飲んでる人と会話が合わないってことですか？

関川：ノリが合わないかもしれないです。お酒を飲んでテンションが上がって話すことがまずないので、相手がお酒で変わっちゃってると、そこに自分を持っていけない。でも羨ましいんですけどね、楽しそうで。でもそこに入れない自分もいる。

本間：なんとなく分かります。僕も人といると、一緒に楽しんでいるはずなのに、ふと我に返る瞬間があって。「あれ、今ズレてるかも」って。

佐藤：でも、そういう場に立った後の2〜3時間の後に、個別に「今日ありがとう」とか言うと、ちょっと居場所感じませんか？ホーム感が出るというか。僕は場作りが好きだからそう考えるんですけど、40人くらいのクラスメイトがいたとして、一人一人拾い上げたいみたいな感覚があって。集団が楽しい人もいれば、少人数で話すのが好きな人もいるし。居場所のあり方は人それぞれ違うから、そのちょっとした1対1が生まれるだけで、その中に居場所があるかもなと思えるというか。その掛け合いの一振りだけで、何か変わるんだろうなと。

本間：たしかに、お寺っていう場所もそうですが、一歩間違えると「一つの同じ居場所を用意してあげる」というスタンスになりそうになるんですけど。多分実際は関わっている人たちそれぞれが自分たちで作っていってもらう場所なので、そこは御坊市でも気をつけなきゃいけないなと思います。

佐藤：役割分担感はありますよね。御坊市の場づくりをする運営側と、僕ら出店者側はその思いを汲んだ上で、お客さんへ伝えることによって全部が温かくなるみたいな。今回の「居場所」というテーマも、出店者みんなが意識するようになっていたらめっちゃいいだろうなと思いました。それがお客さんとの会話の一つになって。1人で来たお客さんだったらここがホームになるような。そういう部分まで持っていけたら、他のイベントにはなかなかないものになるんじゃないかな。

つながりが生まれる、御坊市

手島：いままで御坊市で出店されてみて、お客さんとの出会いとか、印象に残っていることとかありますか？

佐藤：僕は普段、新潟市内が活動の中心になるので、三条のエリアだと来る人の感覚もまたちょっと変わってくるのはやっぱりありますね。そこでの新しい出会いは大きいですし。あと出店者さん同士も、新しい出会いがあるので、ありがたいです。洋服を作っている人が少ないんですよ、新潟ってそもそも。でも長岡で服を作られている方とも御坊市で出会って、そこからちょっとお話を聞いて、情報交換できる場としてもすごかったので、めちゃめちゃありがたい。結構言いふらしていて。「御坊市めっちゃいいよ、すごいとこだよ」って（笑）

本間：ありがとうございます（笑）。関川さんは、お客さんとか出店者さんとかとの出会いで何かありますか？

関川：僕の場合は店舗を持っていないので、ここに来れば会える人がいるという感じで毎年出させていただいて。リピートしてくださる方もいてすごく嬉しいなというのはあります。あと、実はコロナの時に、御坊市で知り合った作家7人で始めたことがあって。ことは別の場所で、気を付けながら小さい形でイベントをやりませんかということで。それが今年もやる予定で6回目になっていっているので、そんな繋がりがあったりとか。出店者同士でも、ここに来ればまた会えるかなみたいな、それも毎年楽しみにしています。

本間：皆さんに関わりたいと思ってもらえる行事になっているのはありがたいですね。関川さんが先ほどおっしゃられた、御坊市が縁になって始まった活動って、集まっている作家さんたちは方針やスタンスが似ているんですか？　それとも全然バラバラだけど、なんとなく集まって居心地がいい感じですか？

関川：作っているものや、作っているものに対するスタンスはバラバラなんですけど、イベントに対するスタンスは割と似ているんじゃないかなと思います。

本間：やっぱり共有するものがどこかにあるんですね。

関川：それとは別に、自分とデザイナーの3人でイベントを企画した時もあったんですけど、その時も「これだけイベントがたくさんある中で、どうして自分たちがやるんだろう」と結構考えたことがあって。そのイベント主催の1人が加茂の七谷に住んでいて、「地元で野菜を作っているおじいちゃんおばあちゃんたちがたくさんいるんだけど、個人的なやり取りで終わっている。そういうお年寄りの作っているものを、もっと多くの人に見てもらう機会をつくってみたい」ということから始まって。私も自分の近所を歩いているとおじいちゃんに話しかけられるんですよ。一応答えるんですけど、僕も用があって、話したいんだけど時間が無いみたいなことがあって。誰かと交流したいけど場がない人って結構いたりするのかなと。であれば、自分ひとりでは対応できないけど、イベントとして場をつくれば、みんなでできるんじゃないかなと考えて。その結果、辿り着いたアウトプットとしては同じマルシェイベントに見えるけど、自分たちがそこに行きつくまでに考えたことは結構違うというか。

本間：御坊市もそういう部分を大事にしたいです。

関川：やっぱり直接人と人が何もなくつながるって、難しいじゃないですか。その間に作っているものや興味のあるものがあると、それを通してつながりやすくなる。そのための舞台みたいな、そういう役割になれているんだとしたら、出店者の方たちにとってもすごく救いになるのかなと思います。

佐藤：御坊市が来場者も出店者も安定して来たくなるのは、どの立ち位置でもそれぞれに対してギフトがあるからなのかなと。例えば募集する出店者さんが多いのも、主催者側にとっては「こんなにも必要とされているんだ」というギフトだと思うんですよ。お客さん、出店者さん、どのポジションでもどこがギフトなのか見えてくるだけでも、全体的な熱が上がりそうだなと。ここに来るとモノだけじゃなく心的なところでも何か持ち帰れるとなると、そのギフトがどう重なったらもっと増えるんだろうなと今考えていました。出店者さんの伝え方によっても違うんだろうなと。

本間：そこが少し難しい所で、お寺という宗教施設でやっていることもあり、あんまり考え方を統一しすぎるのも怖い部分でもあるかなと。そこは出店者さんたちがやりやすいように、それぞれのスタンスでやっていただくというところはブレちゃいけないのかなと思います。でも先ほどから言っていただいているように、御坊市がやっていること、目指していることを、より深められるよう周知して出店者さんと共有していくことは、今後の僕らの課題かなと思ったりしました。

関川：コンセプトやテーマを受け取って、自分なりに解釈できていると、その場所にいる時の感覚やお客さんへの対応の仕方に違いが出てきますよね。

本間：やっぱりコミュニケーションが大事ですね。

佐藤：話が逸れるかもしれないですけど、居場所で考えた時に良いなと思うのが、片付けや設営の時って触れ合う機会があるじゃないですか。机を一緒に運んでいる時にちょっと会話するとか。みんな出店者として自立しているけど、ちょっとしたことでつながったきっかけによって、ここにいる安心感というか。味方が増えていく感覚は、設営や搬入出のときの挨拶とか、それだけでも心が軽くなると思います。

手島：設営の話でいうと、去年、赤ちゃんを連れてきていた出店者さんがいて、スタッフが一人だったから、抱っこしたまま設営しようとしていて。そうしたら、近くの他の出店スタッフの方が、代わりにその赤ちゃんを抱っこして、そのままお散歩に連れていってあげていたんですよね。そういうのってすごく温かいなと。手が空いているからやるわ、という。

佐藤：そういう思いやりがあるのは御坊市ならではの良いところですよね。みんな同じ場所を共有して、いい掛け合いが生まれているなあと。

関川：設営しながら、知っている人たちがいて。喋りかけたり、ちょっと商品を見せてもらったりもできますね。

佐藤：昔、ラフォーレの空き店舗のところで7〜8組くらいでマーケットのイベントをやったときにすごく勉強になったことがあって。1日目はそれぞれが自分の売り上げのために接客して終わって。そのあと全体ミーティングをして「まずお互いのお店が何を商品として出しているか、何を大切にしているかを聞いた上で、お客さんが自分とところで買わなくても他の出店者さんのところを勧め合って全体の売り上げを高めていこう」という取り組みをしてみたんです。そしたら2日目は2倍から3倍の売り上げに変わって。結果的に、勧め合っているから「この人が紹介したものはいい」とか「ここで楽しめたからよかった」というお客さんがすごく多かったんだろうなと。

関川：満足度がありますよね。

佐藤：はい。出店者さん同士でお互いを知り合って、自分のところでは買わなくても、お薦めの作家さんを紹介してあげてそこで出会いが生まれたら、来た人はそれこそ、居場所を感じるというか。それを実践していくと、仲良くなる出店者さんも増えていくし、いい関係性が増えていくんですよね。

関川：たしかに御坊市でも、いらっしゃいますね、「向こうのお店で聞いてきたんですけど」という方。

佐藤：そういう温かい感じになっていくといいイベントだと思えますよね。

手島：今回、「御本市」って題して本を売る企画があって、お坊さんたちに本を寄付してもらうんです。その本にはお寺の名前やプロフィールを挟んでもらって。その売上は御坊市の運営費に充てさせていただく。出店者の方にも本を少し寄付してもらって、「この本を読んでどう感じたか」を書いてもらって。それを手に取った来場者が「この本買ったんですよ」と本をツールとして新たな関わりが生まれたらいいなと。例えばカレー屋さんだったらスパイスの本を出してくれたらいいなとか（笑）結局、売り上げももちろん生活の上で大事ですけど、やっぱり人との関わりもここで生んでほしい。出会いの場になったらなあと。人と出会いたくない人も、人ではなくモノと出会って、それがその人のその後の生活の役に立っていく。そういう出会いももちろん良いなと思っていて、そういう場を目指していますね。

TERABIRAKI
TERAMACHI no ICHI 2025
2026.6/6sat.–7sun.
10:00–16:00
新発田寺町界隈 および 周辺
同時開催
諏訪神社「社びらき」、東公園・蔵春閣「閣びらき」、
五階菱・王紋酒造「蔵びらき」、
市役所 札の辻広場「スマイルマルシェ」、
清水園・大倉庭園・石泉荘・苔香荘「庭びらき」
最新情報はこちらから https://terabiraki.com/ facebook Instagram しばた寺びらき
寺・美楽喜 TERABIRAKI
しばた 寺・びらき